

■今後の方向性について

(1) 食と暮らしを支える多様な農業

①意向調査（農業者）結果からの整理

*問10 これからの農業や農地が持つ役割について重要なこと

「新鮮で安全な農産物の供給」が最も多く(25.6%)、次いで、「まちなかに農地がある景観・風景の形成」(18.7%)、「災害発生時の避難先としてのオープンスペース確保」(13.5%)、「良好な環境（農地周辺の気温低下など）の形成」(12.1%)、「環境に配慮した農業（有機農業、減農薬・減化学肥料栽培、エコファーマー等）の推進」(11.2%)の順となっている。

*問15 農業者への支援の対象について

「経営規模（作付面積、販売金額）の大小にかかわらず、意欲のある農業者への支援を行うべき。」が最も多く、回答者の55.6%を占める。

*問16 今後、農業者に係る支援について重要な内容

「資金的支援（助成金、融資等）」が最も多く（42.1%）、次いで、「人的支援（技術支援、経営支援、農作業支援など）」(27.7%)、「情動的支援（農産物PR、農業イベント等情報発信、生産技術情報提供等）」(25.1%)の順となっている。

②意向調査（市民）結果からの整理

*問28、31 農産物の購入先について

回答者の47.6%が「市内のスーパーマーケットなど実店舗」で日頃、農産物を購入している。次いで、「市内の青果店や個人商店」(14.6%)、「市内の農産物直売所（JA含む）、庭先販売」(14.6%)の順となっている。

*問29 農産物を買う際に重視している点

回答者の35.2%が「品質が良いこと（新鮮であること）」を挙げている。次いで、「価格が安いこと」(27.3%)、「国内産であること」(23.9%)の順となっている。

*問30、32、33 市内産の農産物を購入する理由

回答者の60.7%が「市内産の農産物を購入している」。西東京市産の農作物を購入する理由として、「新鮮だから」が最も多く(38.9%)、次いで、「生産者が分かって安心だから」(15.9%)、「地域の農業を守りたいから」(16.6%)、「安いから」(15.5%)の順となっている。

農産物直売所を利用する理由として、「新鮮だから」(33.9%)が最も多く、農産物直売所を利用するとの回答者の33.9%を占める。次いで、「安いから」(20.7%)、「近くにあるから」(18.5%)と続く。

「西東京市産の農作物を購入していない」回答者の割合は30.1%で、理由として、「特に理由はなし」が最も多く(19.1%)、次いで、「直売所などが自宅の近くにないから」(18.9%)、「直売所の存在・場所を知らないから」(16.6%)、「近くのスーパーマーケット等には地場産コーナーがないから」(14.9%)の順となっている。

③意向調査（子ども）結果からの整理

*問2 西東京市の農業といえば、思い浮かぶもの

「キャベツ」との回答が34.6%であった。次いで、「住宅地の近くにある畑の風景」が26.7%、「給食」が18.3%の順であった。

*問9 めぐみちゃんメニューの参加について

「今後もめぐみちゃんメニューを続けてほしい」が46.5%で最も多く、次いで、「めぐみちゃんメニューに応募したことがある」が42.9%、「めぐみちゃんメニューを出しているお店で食べたことがある」が6.0%であった。

④庁内調査結果からの整理

- ・ふるさと納税返礼品などへの活用の推進。
- ・市内農産物を広く情報発信することと合わせ、品目の拡大などを検討。
- ・効果的な情報発信、産直PR。
- ・健康ポイントアプリ「あるこ」のインセンティブとして農産物直売所で利用できる引換券配布。
- ・保育園や学校給食へ地場野菜を取り入れる活動（配送や購入量の課題がある）。
- ・NPO等市民活動団体と連携した農地保全や地産地消の促進。

⑤農業者ヒアリング結果からの整理

- ・B・C級品（規格外品）や売れ残りの販路を見つけたい。作物を集めて販売や加工品製作、高齢者施設や学校給食提供などへ利用できないか。
- ・直売所の利用促進、PR発信が必要である。
- ・東京都、西東京市としてのブランドを確立してほしい（めぐみちゃんキャラクターの活用）。
- ・市民の国産品（市内産）への理解を高め、農業の魅力発信が必要である。
- ・高騰する光熱費・燃料費・資材費などの補助が必要である。

⑥学生ワークショップ結果からの整理

- ・この会に参加していなかったら、都市農業のことについて知らなかったもので、同じように知らない若者が多いことが課題だと思う。中高校生を中心に若者がもっと関心を持つような取り組みがあると将来的に安定すると思う。
- ・情報拡散のため、SNSを駆使するのがよい。
- ・めぐみちゃんのマークが入った商品があれば、覚えてもらえるのではないか。
- ・今の就活は勉強以外のことにも取り組まないと、うまくいかないため、「学生の頃に力を入れたこと」として、SDGsや食品ロスを紐づけて、農業問題の解決方法を見出すようなプログラムがあればよい。

都市農業・農地の多面的機能の理解の中で、「新鮮で安全な農産物の供給」は市民に重視されている。ただし、市内の農産物直売所の利用は限定的であることから、直売所機能の充実が求められる。また、子どもたちからの意見としてめぐみちゃんメニュー事業についての評価は高いことから、この継続的な展開は有効であるが、流通面での改革が必要であると考え。農業者から意見があがった、BC級品の活用・販路形成の要望との関連から、一時加工利用や、公共施設でのさらなる利活用の推進が一つの解決策になると考える。情報発信については、学生の意見からもSDGs、食品ロスのような社会的価値の高い取り組みとしての発信が有効と考える。

(2) 多様な担い手が生きがいややりがいを感じる農業経営

①意向調査（農業者）結果からの整理

*問 11 農業収入を安定させるために、今後取り組んでいきたいこと

「特に何も検討していない」が最も多い（15.6%）が、次に「出荷先の多様化(市場だけでなく直売所への出荷や直販、契約栽培の実施)」（14.5%）、「新しい品目の生産導入」（14.1%）、「肥料や農薬の適正量の使用によるコスト管理・安全管理」（13.6%）の順となっている。

*問 20 認定農業者制度について

「認定を受けたいと思わない」が最も多く（31.6%）、次いで、「認定農業者の制度内容を理解し、既に認定を受けている」（22.2%）、「制度内容は理解し、認定を受けたいが「認定基準」を満たすことが難しい」（17.9%）の順となっている。

*問 22 援農ボランティアとして、受け入れたい人材

「受け入れを希望しない」が最も多く（55.5%）、次いで、「繁忙期（1週間程度）など、必要な際だけでも手伝いが可能である方なら受け入れたい」（19.5%）の順となっている。

*問 27、28 有機農業など環境に配慮した農業について

「現在取り組んでおり、今後も継続したい」（40.6%）が最も多く、次いで、「現在取り組んでおらず、今後も取り組む予定はない」（31.2%）、「現在取り組んでいないが、今後取り組みたい」（12.4%）の順となっている。

どのような環境に配慮した農業に取り組んでいるかについては、「農薬の使用量を減らしている」（55.3%）が最も多く、次いで、「化学肥料を使わないなど環境に配慮した肥料を使用している」（27.3%）、「環境に配慮した機材や資材を利用している」（11.4%）の順になっている。

有機農業など環境に配慮した農業に取り組むにあたっての課題は、「通常と比べ、労力がかかる」（40.9%）が最も多く、次いで、「通常と比べ、収益が見込めない」（24.6%）、「技術が必要のため、指導が必要」（17.5%）の順となっている。

②意向調査（市民）結果からの整理

*問 39 農作業や、アルバイトやボランティアでの農業の手伝いへの興味について

「興味はない」（58.4%）との回答者が最も多い。興味がある回答者の中では、「アルバイト（有償）として、農業をやってみたい」が最も多く（18.4%）、次いで、「ボランティア（無償）でも農業をやってみたい」（11.3%）の順となっている。

④庁内調書結果からの整理

・農福連携の促進。

⑤農業者ヒアリング結果からの整理

- ・農業で生計が立てられない（専従農家への支援が必要である）。
- ・農業経営への助言・指導支援が必要である。
- ・農業者同士で交流、話合える場がほしい。
- ・入会審査では、若い農業者を1年間見習い期間として、技術的な指導をしている。

⑥学生ワークショップ結果からの整理

- ・行政側のハード面での支援の手薄さを感じた。農家の持つ近隣への貢献、農業を続けたいという気持ちに応えられる施策があると良い。
- ・これから人不足等による問題が深刻化する可能性があると感じた。
- ・新規就農の魅力を発信することで、農に携わる人が増えると良いと思った。
- ・新規で始める時の経営は大変そうだった。一番は農業を楽しむことが大切なのかなと思った。
- ・農業を行う環境は簡単ではないと思った。やりたい人、関わりたい人がもっとやりやすい仕組みがあればより活性化すると思った。
- ・後継者問題が農業ではやはり注目されているように感じた。新規就農される方の支援やアフターケアなどの環境作りが市としての取組みに組み込むことも重要なのかと感じた。
- ・代々引き継げるよう、若者に魅力を伝えること。
- ・有機農業の方がいい（虫の声があることや、環境にやさしいこと）。
- ・農業のアルバイトは就活に活かせる、経験ができるなどメリットがある。
- ・学生は夏休みや平日に授業のない時間などもあるため、その時間を活用したアルバイトができる。有償はお金でなくて、野菜など現物支給でもよい。

農業収入の安定に向けて、限定的ではあるが、出荷の多様化や新しい品目の生産導入、肥料や農薬の適正量の使用によるコスト管理安全管理の要望はある。特に減農薬の取組については半数以上の農業者からの回答があるものの、労力がかかる作業に対しての人手不足の課題はうかがえる。一方で、市民や学生からのアルバイトや援農ボランティアへの興味は高く、播種・定植や野菜収穫作業だけでなく、草取りや片付け、出荷する農産物のラベルづくりなどの作業の担い手として期待することを考えることができる。次世代の担い手の確保については、現在の農業者の技術、生産技術だけでなく販路との関係づくりのノウハウを引き継ぐための方策も必要と考える。

(3) 農地の保全と活用

①意向調査（農業者）結果からの整理

*問 23 所有（市内・市外）及び貸借して営農する農地の合計面積

「5a～30a 未満」（30.3%）が最も多く、次いで、「50a～100a 未満」（23.9%）、「30a～50a 未満」（17.9%）の順となっている。

*問 24 農地保全・活用の課題について

「相続時の税負担が課題」と挙げる回答者が最も多く、回答者の 27.2%を占める。次いで、「固定資産税などの税負担が課題」（17.6%）、「営農環境の悪化（周辺宅地住民との関係など）」（12.3%）、「農業資材・肥料等の価格高騰」（12.3%）の順となっている。

*問 25 生産緑地の貸借について

生産緑地の貸借について、「生産緑地を貸す予定はない、借りる予定はない」と挙げる回答者が最も多く、回答者の 75.1%を占める。次いで、「自身が所有する生産緑地を貸したい・貸しても良い」（16.9%）の順となり、「生産緑地を借りたい・借りても良い」（3.5%）に留まっている。

生産緑地を貸したい・貸しても良いとお考えの方が望む活用は、「JA や行政に貸して市民農園を開設してほしい」（41.2%）が最も多く、次いで、「地域の担い手に貸して営農を続けてもらいたい」（27.5%）、「新規就農者に貸して、営農を続けてもらいたい」（15.7%）の順となっている。

②意向調査（市民）結果からの整理

*問 34 西東京市内の農業や農地のイメージについて

「新鮮な野菜を供給している」を挙げる回答者が最も多く（22.8%）、次いで、「季節を感じることができる」（18.9%）、「まちの緑を豊かにしている」（18.1%）、「子どもの教育や農業体験の場として役立っている」（8.7%）、「自然や生態系の保全の場として役立っている」（8.4%）の順となっている。

*問 35 農業や農地が持つ役割について、今後期待すること

「市民の日常生活への新鮮で安全な農産物の供給」を挙げる回答者の割合が最も多く（23.3%）、次いで、「学校給食等での、新鮮で安全な農産物の供給」（15.8%）、「子ども達が学校教育や情操教育の中で、農業に触れる機会の創出」（10.9%）「まちなかに農地がある景観風景」（10.4%）の順となっている。

③意向調査（子ども）結果からの整理

問 1 西東京市に畑など農地は多いと思うか

「どちらかというと思う」との回答が 50.0%であり、次いで、「多いと思う」（28.4%）となっている。

問 4 西東京市内の農業や農地について感じる事

「地域の食料をつくるはたらき」が役に立っていると感じている割合が 77.8%であった。「食を学ぶはたらき」、「環境を守るはたらき」、「まちなみを良くするはたらき」など主な機能について、役に立っていると回答が多い。

④庁内調査結果からの整理

・災害応に活用する農地等のオープンスペースの把握に努める。

・延焼断機能・避難空間機能として農地を保全。

・生産地の買取りによる公園化。

・農地の市民農園としての活用。

⑤農業者ヒアリング結果からの整理

・農地の減り方が大きいと、大きな打開策が必要である。

・生産緑地制度への理解促進、情報提供が必要である。

・耕作放棄地を有効活用してほしい（体験農園への利用等）。

・新規就農や新規農産物の作付け（土づくり）への助成支援があると良い。

・地域の特色を表す農具や史料の収集や特徴的な農家建造物の調査、保存。

⑥学生ワークショップ結果からの整理

・西東京市は、東京都の中でも農地がまだ多くある貴重な地域であると感じた。今後、東京・日本の農地保全に向けて前線で取り組んでいくのだろうと考えた。

・農地の持つ多面的な機能を活かした農業を行っており、続けてほしいと思った。

・農地を借りている場合、貸借農地の返却を考えた時に、思うような開拓ができないこと。ハウスの設営などこのままでは進んでいかなないように感じた。

・農地を守る＝農業振興ではないという点を踏まえ、生産「緑地」とあるように、農地だけでなく、緑地として多面的な機能を打ち出したい。

・防災面の価値がある。

農地の保全については、従前からの課題である規模の縮小、税負担、営農環境の悪化（周辺住宅地住民との関係など）との課題がある。生産緑地の貸借の制度が運用されているものの、その活用は限定的であり、現状の担い手の規模拡大、後継者の圃場確保のための制度活用は推進する必要があると考える。また、行政として防災の観点からオープンスペースの必要に対して農地の役割を発揮する必要性が指摘される。農業・農地が持つ多面的機能としての防災面や環境面での価値を高める策が引き続き重要であると考えられる。

(4) 農業を通じた交流

①意向調査（農業者）結果からの整理

*問 12 民間事業者等との連携や実証で関心があるもの

「特に関心はない」が最も多い(39.4%)が、次に「学校・教育関連事業者連携による子どもたちの教育への参画」(13.9%)、「食品残渣や廃棄される農産物を活用した堆肥づくりなど環境・エシカル事業による社会課題の解決」(11.8%)の順となっている。

*問 17 今後の直売所(庭先販売所等)やマルシェ(朝市・青空市など)への出店等についてのお考え

「自身の経営する直売所での販売を継続・拡大したい。」との回答が最も多く(46.2%)、次いで、「JAの農産物直売所を利用したい」(24.4%)、「市内など近隣で開催されているマルシェ(朝市・夕市、青空市など)には出店したい」(9.0%)の順となっている。

*問 36 今後、農業を通じた市民等との交流にあたっては、どのような取り組みが効果的か

「即売会等の販売イベントの実施」が最も多く(23.8%)、次いで、「体験型のイベントの実施」(23.2%)、「朝市の実施による市民との交流」(19.1%)、「農業体験農園の開設及び運営」(10.0%)の順となっている。

②意向調査（市民）結果からの整理

*問 37 農業体験など農とのふれあいの経験

「農とのふれあいは特にない」(57.9%)が最も多く、回答者の過半数以上を占める。農とのふれあいの経験がある回答者の中では、「自宅で野菜づくりや園芸を行っている」が最も多く(18.5%)、次いで、「市内の農家のところで、収穫や農作業を行ったことがある」(6.0%)、「市民農園を利用している、又は利用したことがある」(5.2%)の順となっている。

*問 38 今後、市民農園や農業体験農園といった農園を利用したいか

「農園の利用はしたいとは思わない」回答者が最も多く(57.4%)、次いで、「農業者からの指導を受けられる農業体験農園を利用したい」(18.2%)、「市民農園を利用したい」(14.5%)の順となっている。

③意向調査（子ども）結果からの整理

*問 6 農業体験など農とのふれあいの経験について

「自宅で野菜づくりや園芸を行っている」が21.6%で最も多く、次いで、「市内の農家のところで、収穫や農作業体験を行ったことがある」が21.2%、「農業体験農園を利用したことがある」が18.4%であった。

*問 8 農業・農作業への興味について

「自宅の庭やベランダで野菜などを育ててみたい」が34.0%で最も多く、次いで、「あまり興味がない」が33.0%、「農業体験をしてみたい」が19.0%であった。

④庁内調査結果からの整理

- ・児童館での農業体験の実施、農のアカデミー体験実習、西東京市民まつり、公民館や図書館での企画・講座など農業者との連携。
- ・地域コミュニティ活性化の活動と農業の連携の推進。
- ・イベントでの農産物販売スペース提供。公園内でのファーマーズマーケット、マルシェ等の開催。
- ・地球温暖化防止や生物多様性保全に効果の高い取組に対して連携・協力。
- ・農家との交流を深めることができる農業ツアーを行い、講座修了後は学んだ知識を活かし農家でのお手伝い(援農)や緑化ボランティア活動等、地域で活躍していただける人材の育成。
- ・東大生態調和農学機構(旧東大農場)との連携。
- ・生産者等の顔が見える関係を構築することで、より安全で安心な食材への興味・関心を高める取組を継続。
- ・校地内の畑や学級農園において野菜の栽培や稲などの栽培活動や、緑のカーテンの取組等を行っている。

⑤農業者ヒアリング結果からの整理

- ・市民を巻き込んだ農業経営(観光農園や体験農園、農園付き不動産など)が必要である。
- ・医療福祉事業者やアパレル事業者や大学など産学官等との連携ができないか。
- ・周辺住民の理解促進のためにも、子どもたちも含め農業体験等交流機会の創出は有効だと思う。

⑥学生ワークショップ結果からの整理

- ・近隣の住民の方とのつながりが大きなメリットだと感じた。
- ・幼稚園生や小学生の子どもたちに農業を教える機会があつてとても楽しそうだった。
- ・体験農園というものを初めて知ったけれど、おもしろい仕組みだと思った。
- ・農地保全の手段の1つとして体験農園があると学びました。野菜を作って販売するだけではなく、人々の交流の場を畑から作り上げることを農業者の使命の一つでもあると感じた。
- ・農業を通して様々な年齢層の人が交流する場となっていて、農業者の方の考え方が素晴らしいと思った。
- ・中高校生の農業体験があつたらおもしろそうだと思う。大学生も農業イベントがあつたら、参加してみたい学生はいると思うので、そのような機会があつたらいいなと思った。
- ・学校の美術部などに呼び掛けて、農産品などのラベルを作ったり、農家のロゴを作り、運搬する段ボールなどに描くなどできないか。
- ・農作物の加工体験は面白いのではないかと(味噌づくり、醤油づくり等)
- ・高校でも農業の部活などあつたら面白そう。
- ・体験は楽しみながら知ることができるのがよい。
- ・収穫体験もいいが、収穫から販売まで体験できるものがあるとよい。

農業の体験の場・機会の拡充については、これまでも推進してきた中ではあるが、その市民の経験者は限定的である。特に子ども達に対しての農業体験の提供は、教育の観点からも、農地周辺住民との関係構築の観点からも重要であることが指摘できる。ただし、自宅で野菜作りや園芸を行っているという市民は一定程度あることから、ここに農業者のスキルを掛け合わせることは考えられる。さらに、新鮮な農産物が身近にある環境を市民は一定程度評価していることから、その購買しやすい方法の検討を引き続き推進することが有効である。農業者にとっては、子どもたちの教育として参画することや、食品ロスなど社会課題の解決としての事業展開には一定の関心を示すとともに、医療福祉事業者やアパレル事業と農業との連携についての可能性についての意見もいただいている。